HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アイヌ遺骨問題に関する関係者インタビュー
Author(s)	成田, 真由美; 川本, 思心
Citation	CoSTEP研修科 年次報告書, 5(2), 1-18
Issue Date	2021-09-06
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/82656
Type	report
File Information	NeXTEPreport _2021-9-6_narita.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

アイヌ遺骨問題に関する関係者インタビュー

成田　真由美（2 年目）

2021 年 9 月 6 日
担当教員：川本思心

概要

本調査では昨年度[1]に引き続き、北海道大学が研究のために収集・保管しているアイヌの遺骨、副葬品など、過去の研究が現在にもたらした「負の側面」に注視し、関係者へのインタビューを敢行します。昨年度は北海道大学アイヌ・先住民研究センター長であり、政府が設置したアイヌ政策の在り方に関する有識者メンバーでもある常本照樹教授（当時）にインタビューを行いました 。

今年度は、遺骨返還に関わる活動をされているアイヌ民族である木村二三夫氏にインタビューを行いました。また、北海道大学および全国の大学が保管していたアイヌ民族の遺骨が集約された民族共生象徴空間（ウポポイ）に併設された慰霊施設も訪問しました。

背景と目的

2018 年は北海道命名 150 年の記念事業が開催され、2019 年は「アイヌの人々の誇りが尊重される社会を実現するための施策の推進に関する法律（アイヌ政策推進法)」が施行されました。そして、2020 年はコロナ禍の中、4 月 24 日オープンの予定を 2 度延期し、7 月 12 日に国立民族共生公園と国立アイヌ民族博物館、慰霊施設から成る民族共生象徴空間（ウポポイ）[2]が開園しました。「アイヌの方々による尊厳ある慰霊を実現」するための慰霊施設は、ウポポイ中心部の喧騒から離れた小高い丘にあります。慰霊施設は、ウポポイ開園前の 2019 年に完成し、全国の 12 大学が保管していたアイヌ民族ご遺骨が集約されました。1930 年代から研究のために集められたアイヌのご遺骨は、ここで返還される日を待つことになります[3] 。

前年度（2019 年）は、アイヌを取り巻く社会を政策の部分から知るために、北海道大学アイヌ・先住民研究センター長（当時）であり、政府が設置したアイヌ政策の在り方に関する有識者メンバーでもある常本照樹教授にインタビューを行いました 。アイヌ民族を取り巻く日本特有の社会環境と法整備だけでなく、世界の先住民族の事例もお伺いしました。インタビュー記事は、双方の了承のうえで今後公開を予定しています。インタビュー

---

[1] 成田真由美・川本思心 2020: 「アイヌ遺骨問題に関する関係者インタビュー」『CoSTEP 研修科年次報告書』4 (1). http://hdl.handle.net/2115/78059（2021 年 7 月 24 日閲覧）

[2] 民族共生象徴空間　公式ホームページ https://ainu-upopoy.jp/　（2021 年 7 月 24 日閲覧）

[3] 文部科学省 2019：『慰霊施設に集約された大学が保管するアイヌの人々の御遺骨の数について（令和元年 12 月 16 日現在)』　https://www.mext.go.jp/a_menu/kagaku/ainu/kakugi-kettei20190906.pdf（2021 年 2 月 9 日閲覧）.

概要は、成田 2020：CoSTEP 研修科 年次報告書に記載しました。

それらを踏まえて、今年度（2020 年）は、アイヌ民族であり遺骨返還を強く求めている平取町在住の木村二三夫氏へのインタビューを行いました。彼の持つ怒りと悲しみに触れる貴重な機会となりました。インタビューでお伺いした内容は記事化し、後日公開予定です。

また、様々な組織や団体がアイヌ民族に関する講演会を行っています。学術界だけでなく市民が中心となった講演会は、この問題自体を知らなかった市民が「アイヌ遺骨問題」を考える機会を提供します。すべてに参加することはできませんが、開催記録として残すこともアイヌ民族を取り巻く社会環境を考察するうえで意義があることだと思います。

実施概要

今年度は北大イチャルパへの参加、ウポポイの見学、関係者インタビューの実施、中間報告での発表、関連講演会への参加を行いました。

7[4]. 2020 年 7 月 31 日 「北海道大学アイヌ納骨堂におけるイチャルパ」参加

2020 年北大イチャルパ開催時の北海道大学アイヌ納骨堂に保管されているアイヌ遺骨は、計算上 117 体と 53 箱（文部科学省 2019[5]と文部科学省 2020[6]の差し引き数から）となります。なお、全国の大学で保管していたアイヌ遺骨のほとんどは、2019 年内に白老にある慰霊施設に集約され、同年 12 月 14 日に北海道アイヌ協会が主催したイチャルパ（白老方面では、シンヌラッパという）が開催されました。

2020 年は、コロナ禍の影響もあり、全道からアイヌ協会の支部が北大イチャルパに集まってきているようではありませんでした。1984 年の第 1 回北大イチャルパは浦河アイヌの方が儀礼を取り仕切り、それから浦河地方の儀礼に則りイチャルパが開催され続けてきました。既に当時も儀礼を執り行える方が少なくなっていたとも聞きました。2020 年の北大イチャルパは浦河アイヌ協会と札幌アイヌ協会が協力して行っているようでした。儀礼の最中も祭祀承継のためか、参加者同士で説明したり手順を確認する様子がありました。口伝文化は、このように継承され続けるのだという思いと、もしかしたら子どものころから参加し体験することにより、説明されなくても体に染み渡るように体得されるものだったのではないかという思いが交錯しました。後者であれば、明治政府が推し進めた同化政策

---

[4] 章番号は昨年度の報告書（成田他 2020）からの連番とした。

[5] 文部科学省 2019： 『大学等におけるアイヌの人々の遺骨の保管状況の再調査結果』（平成 31 年 4 月現在）
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/science/detail/__icsFiles/afieldfile/2019/04/25/1376459_4_1.pdf （2021 年 2 月 9 日閲覧）

[6] 文部科学省 2019：『慰霊施設に集約された大学が保管するアイヌの人々の御遺骨の数について（令和元年 12 月 16 日現在）』 https://www.mext.go.jp/a_menu/kagaku/ainu/kakugi-kettei20190906.pdf （2021 年 2 月 9 日閲覧）

が、文化の継承を阻害した結果であり、それを取り戻すための現代の努力なのかと思うと、大和ルーツの私は、やはり複雑な思いがよぎります。

見学者も、2019 年のような団体が横断幕を掲げることもなく、メディアも少ないように感じました。アイヌプリ（伝統的なアイヌの作法）で行われる儀礼では、見学者への供物のお振る舞いもありました。CoSTEP14 期ライティング・編集班の成果物である『いいね！Hokudai』でのシリーズ企画「アイヌを識る〜北大イチャルパでの祈り」を執筆するときに調べたイチャルパ儀礼には、「屋外のヌササンに供物を撒く（チャルパする。そうすることにより、供物がポクナシリに届く）とともに、その場にいる人々も供物を食べます。」[7]とある通りの体験をさせていただきました。少しだけ、見学者から参加者に近づいたような気がしました。

イチャルパで頂いた胡麻のシト（団子）

[7] 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 2007：アイヌ生活文化再現マニュアル 先祖供養 【シンヌラツパ・イチヤルパ】https://www.ff-ainu.or.jp/manual/files/2007_16.pdf （2021 年 7 月 27 日閲覧）

8.　2020 年 9 月 22 日　民族共生象徴空間（ウポポイ）訪問

ウポポイは、アイヌ文化の復興と発展のナショナルセンターとして、北海道白老町に 2020 年 7 月 12 日（日）にオープンしました。当初 4 月 24 日オープンの予定は、コロナ禍のため 5 月 29 日に延期されましたが、それも再延期となり 7 月のオープンとなりました。現在も入場には事前の予約が必要です（2021 年 7 月 27 日現在)。

ウポポイの主要施設は、国立民族共生公園、国立アイヌ民族博物館、慰霊施設があります。以下では順にそれらの概要と、見学して感じたことを述べます。

国立アイヌ民族博物館 2F パノラミックロビーから見る国立民族共生公園

8-1　国立民族共生公園

公園内に体験施設が建つ体験型フィールドミュージアム。各施設では、アイヌ古式舞踊の上演や伝統芸能体験、食文化体験や伝統工芸品の製作体験等を通じてアイヌ文化を体感することができます。最新技術を取り入れた演出や伝統を軸にして構成された舞台には興味がありますが、今回は歴史的な文脈からウポポイを鑑賞することを目的としているので舞台鑑賞はしませんでした。

「e　私たちの歴史」のコーナーにある展示

8-2　国立アイヌ民族博物館

先住民族アイヌの歴史と文化を主題とした日本初・日本最北の国立博物館。基本展示室と特別展示室のふたつで構成されています。また、館内表記もアイヌ語を第 1 言語としています。コインロッカーやシアターなどもアイヌ語で表記されています。コインや映画などアイヌ語にはない概念をどのように訳したのかにも興味深いです。

基本展示室は 6 つのテーマで展示が構成され、アイヌ民族の視点から解説が行われています。館内における解説の「私たち」はアイヌ民族であり、大和系日本人ではありません。そして、展示も見やすく美しくまとまっている印象でした。

私の調査テーマである「アイヌ遺骨問題」に関しては、パネル 2 枚と北海道大学保存のアイヌ人骨イチャルパの式次第の展示がありました。パネルは「研究倫理をただす」と「研究者による人骨の収集と返還の道のり」。写真は後者のパネル（中央段の左端）で、「19 世紀後半から、アイヌ民族の起源をめぐる研究が盛んになり、日本国内外の研究者などによって墓地から人骨がもちさられました。1980 年代以降、大学や博物館で保管されている人骨の慰霊が行われ、地域への返還が求められています。現在、その多くが民族共生象徴空間の慰霊施設にて一時的に保管され、慰霊が行われています。」と解説されています。

他にも、漁労狩猟の禁止や強制移住、同化政策についての解説もあります。しかし解説は、広い館内のテーマごとに点在しているため、体系的に理解することは難しいかもしれません。また、美しい着物や木幣などの展示物に比べ、人目を引かないであろうことも容易に想像されます。文化だけでなく「負の側面」をどのように展示し、どのように後世へ語り継ぐのかは、博物館としての今後の課題だと思いました。アイヌ民族と大和系日本人だけでなく、海外からの視点も取り入れた議論と、専門家だけではない開かれた対話が行われることを望みます。

特別展示室では「私たちが受け継ぐ文化～アイヌ文化を未来へつなぐ～」が開催されていました。リーフレットのごあいさつや説明文には、差別や迫害から文化や技術の継承が困難だったことが語られ、その中でも受けつないできた文化について工芸作品を中心に展示してありました。展示されている作品は素晴らしいものが多く見ごたえもあります。しかし、ほとんどの展示は撮影禁止でした。

写真撮影が許可されていた貝澤ウトレントクと孫の勉、ひ孫の徹と幸司の作品

8-3　慰霊施設

アイヌの人々による尊厳ある慰霊を実現するための施設であり、アイヌの人々による受け入れ体制が整うまでの間の適切な管理を行う墓所も併設されています。この慰霊施設に集約されているアイヌの遺骨について、ホームページ[8]には「発掘・収集時にアイヌの人々の意に関わらず収集されたものも含まれていたと見られています」と明記され、「ここを訪れる多くの方に、このような歴史を理解していただくことが、未来の共生社会の礎となるものと考えます」と結ばれています。

慰霊施設は、ウポポイの観光施設（国立民族共生公園、国立アイヌ民族博物館）から離れた小高い丘の上にあります。2019 年 9 月、ウポポイのオープンに先駆けて完成しました。11 月から日本国内の 12 大学が保管していたアイヌ遺骨は慰霊施設の墓所に集約を開始し（実際に集約されたのは 9 大学から）、12 月にはアイヌの人々による最初の慰霊が行われました。

文部科学省の発表によれば、12 大学で保管していたアイヌ遺骨は 1574 体（特定遺骨 21 体含む）と 346 箱[9]。このうち慰霊施設に集約されたのは、9 大学 1287 体（特定遺骨 12 体）と 287 箱[10]。保管数と集約数の差は、係争中もしくは和解による引き渡し、手続により返還されたものと推測できますが、文部科学省も各大学もその数を公開していません。

2020 年に札幌医科大学から慰霊施設への集約が追加され、1323 体（特定遺骨 12 体）と 287 箱[11]が、慰霊施設の墓所で保管されています。これは、浦河町から収集された遺骨に対する訴訟が取り下げられたため、返還手続きのために集約されたようです[12]。

尚、慰霊施設集約後の返還申請の受付は国土交通省が行います[13]。

ウポポイの中核施設とはいえ、観光的な側面は持ち合わせていない慰霊施設には、入り口にも施設内にも看板や説明文がひとつもありません（当時）。ウポポイ園内マップ[14]には位置情報が記載されているだけです。ホームページには「ここを訪れる多くの方」とありますが、訪れる方は限定的でしょう。

---

8 ウポポイ　慰霊施設の由来より https://ainu-upopoy.jp/facility/cenotaph/　（2021 年 7 月 26 日閲覧）

9 文部科学省 2019：大学等におけるアイヌの人々の遺骨の保管状況の再調査結果（平成 31 年 4 月現在） https://www.mext.go.jp/component/a_menu/science/detail/__icsFiles/afieldfile/2019/04/25/1376459_4_1.pdf　（2021 年 2 月 9 日閲覧）

10 文部科学省 2020：慰霊施設に集約された大学が保管するアイヌの人々の御遺骨の数について（令和元年 12 月 16 日現在）https://www.mext.go.jp/a_menu/kagaku/ainu/ikotsusuu20201013.pdf　（2021 年 2 月 9 日閲覧）

11 文部科学省 2020：慰霊施設に集約された大学が保管するアイヌの人々の御遺骨の数について（令和 2 年 10 月現在）https://www.mext.go.jp/a_menu/kagaku/ainu/ikotsusuu20201013.pdf　（2021 年 2 月 9 日閲覧）

12 文部科学省のホームページより https://www.mext.go.jp/a_menu/kagaku/ainu/index.htm　（2021 年 7 月 27 日閲覧）

13 国土交通省「慰霊施設において管理するアイヌ遺骨等の返還手続について」 https://www.mlit.go.jp/hkb/hkb_fr1_000008.html　（2021 年 7 月 27 日）

14 2020 年 9 月園内で配布しているリーフレットを指す。公式ホームページの「ウポポイ（民族共生象徴空間　ウアイヌコロ　コタン）園内 MAP」もイラスト部分には慰霊施設の記載はない https://ainu-upopoy.jp/facility/　（2021 年 7 月 27 日閲覧）

また、慰霊施設はアイヌの人々による慰霊のために使用されるものですが、使用するための手続等をウポポイのホームページ、ウポポイの管理運営を行う公益財団法人アイヌ民族文化財団のホームページ、遺骨返還を行っていた文部科学省のホームページ、慰霊施設を管轄する国土交通省のホームページから見つけることはできませんでした。ただし、北海道アイヌ協会などが主体となる慰霊が行われたので、アイヌの方々には手続等が知らされているのかもしれません。サイレントアイヌを含む北海道アイヌ協会や各支部に所属していないアイヌの方々にもアクセスしやすい状況になっていれば良いのですが、これ以上は分かりませんでした。慰霊施設への集約に賛同した北海道アイヌ協会と、全てのアイヌ遺骨返還を強く望む方々との分断が加速しないことを祈るばかりです。

左から墓所（内部非公開）、慰霊行事施設、モニュメント

9.　2020 年 9 月 25 日　関係者インタビュー②

インタビューのおひとり目は、アイヌを取り巻く社会環境を俯瞰的に捉えるために、政策面のお話を伺える常本教授にご協力いただきました。そして、おふたり目は「アイヌ遺骨問題」の当事者であるアイヌ民族の方から率直な気持ちをお伺いしたく、以前から講演会などに登壇していた木村二三夫氏にお願いしました。木村氏とは、2019 年の豊平川で行われた新しい鮭を迎える儀式「アシリチェプノミ」でもお会いしたこともあります。

木村氏は、姉去から平取町上貫気別に強制移住[15]させられたアイヌ民族の子孫です。二風谷アイヌ遺骨を考える会共同代表をつとめており、平取町の地域返還手続[16]の中心人物のおひとりです。大学等の遺骨収集の違法性、返還と謝罪についてだけでなく、研究についてのお考えを伺いました。「過去に目をつむるものに未来はない」歴史的事実の周知徹底とアイヌの若者がアイヌを誇れるような社会を望んでいるとのことでした。

今後インタビューのまとめをしていく予定です。

インタビューの様子。左が筆者。右が木村二三夫氏

[15] 1916 年（大正 5 年）、御料牧場とされた土地周辺に住んでいた 70 戸アイヌが、牧場側の都合で転出させられた。姉去は現在の新冠町朝日。上貫気別は現在の平取町旭

[16] インタビュー後の 2020 年 10 月、北海道大学から 17 体、東京大学から 6 体、新潟大学から 1 体、札幌医科大学から 10 体の合計 34 体が平取町に返還された。平取町アイヌ遺骨慰霊施設「サスイシリ（悠久）」に納められたそうです「文部科学省　アイヌ遺骨等地域返還連絡室 2020：「地域返還対象団体となり得る申請団体が返還を求める御遺骨等に関する情報」https://www.mext.go.jp/content/20191220-mxt_gakkikan-000002849_1.pdf（2021 年 6 月 28 日閲覧）

10.　2020 年 10 月 31 日　研修科 2019 中間報告会　オンライン開催

受講生、修了生を中心とした CoSTEP 関係者限定の中間報告をオンラインで開催しました。10 月 3 日から 11 月 14 日までの土曜日夜に開催。1 日の報告はふたりとし、それぞれ 1 時間の中で報告と質疑応答を行いました。私が報告したのは 10 月 31 日、参加者は 21 名でした。

私にとって 2 回目となる 2020 年度研修科中間報告会では、1 回目の 2019 年度研修科報告会では配布資料にまとめたアイヌ遺骨問題とはなにか、何故この問題が起こったのかを中心に説明しました。

ご参加いただいた方からは、「知らなかったが、知らなければならないこと」という感想を頂き、知るきっかけを提供できたことは成果のひとつといえます。この問題は多くの方に関心を持って欲しい反面、とてもセンシティブです。

中間報告会の資料の一部。ウポポイにある慰霊施設を訪問したときの様子も報告

11.　講演会等への参加

コロナ禍の 2020 年度は、アイヌ遺骨問題に関する講演会だけでなく、アイヌをめぐる近現代を扱う講演会、勉強会、シンポジウム等もほとんどオンラインで開催されました。パソコンや携帯から気軽に参加できるので、敷居の高さを感じさせない効果もあると思います。講演会などに参加することは、「知る」から「考える」という行為を後押しします。アイヌ民族が辿った歴史を知ることが、なぜ大学という組織が膨大な遺骨を収集することを可能にしたのかを理解する一助にもなります。

以下に列記する講演会以外にも開催されている可能性は否定できませんが、定期的に一般に公開されている講演等（刺繍や木彫りなど技術習得を目的とする講座は除く）を開催している主な組織、団体と 2020 年度の講演会等になります。開催数は 25 回。アーカイブ視聴も含めて私が参加できたのは 7 回でした。

11-1. 北海道大学　アイヌ・先住民研究センター

当該センターは、「アイヌ民族の文化を振興し、社会的地位を向上させるための政策等の実現に寄与することにより、アイヌ民族が誇りをもって自らの文化を享有し、伝承してゆける社会の実現に貢献」することを目的として、2007 年に設立されました。世界の先住民族、少数民族が直面してきた課題やアイヌ民族に関する事柄をテーマに、講演会やセミナーなどを開催し続けています。

私も、2015 年の「アイヌを学ぶ」連続講座から可能な限り参加し、聴講してきました。

【ウェブサイト】https://www.cais.hokudai.ac.jp/

回	開催年月日	タイトル	講演者（所属）
1	2020 年 10 月 28 日(水)	アイヌ文化研究史と課題：先住民研究として求められるもの	加藤博文 （北海道大学　アイヌ・先住民研究センター　教授）
2	11 月 25 日(水)	アタヤル語とセデック語の「神霊の橋」 -「虹」にまつわる言葉のはなし-	落合いずみ （同　博士研究員）
3	12 月 16 日(水)	1878 年にハインリッヒ・フォン・シーボルトが集めたアイヌ民具	山崎幸治 （同　准教授）
4	2021 年 1 月 27 日(水)	「アイヌ側からみたアイヌ史」はいかに不／可能か－貝沢正の私的文書から各アイヌ史の編集過程を見る－	新井　かおり （同　博士研究員）
他	2 月 16 日(火)	先住民族との和解、謝罪とヒーリング -オーストラリアとカナダの比較から-	窪田幸子 （神戸大学　国際文化学部教授）
5	2 月 24 日(水)	先住民と手工芸開発：台湾原住民族と織りの事例から	田本　はる菜 （同　博士研究員）
6	3 月 17 日(水)	先住民研究の現在－「民族誌の三者構造」と研究倫理的課題－	石原　真衣 （同　助教）

＜第 4 回の概要と所感＞

1994 年発行の「アイヌ主体のアイヌ史」を社団法人北海道ウタリ協会（現公益社団法人北海道アイヌ協会）が編纂する過程で、中心的な役割を担った故貝沢正研究の報告。貝沢氏が残した多くの資料から「アイヌ史」編纂にまつわる部分を、氏の孫でもある研究者が紹介する [17]。

貝沢氏が訴えていた「和人研究者がアイヌ主体のアイヌ史の編纂を阻害した」ことを中

[17] 荒井かおり 2021：「アイヌ側からみたアイヌ史」はいかに不／可能か－貝沢正の私的文書から各アイヌ史の編集過程を見る－」　北海道大学学術成果コレクション（HUSCAP）
https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/bitstream/2115/80893/4/10_How%20might%20%E2%80%9CAinu%20history%20from%20an%20Ainu.pdf

心に、貝沢氏の残したメモなどから事実確認を行いながら考察する。当時の和人研究者が「誰がアイヌか問題」に固執するなど、議論が一向に進まないことを悲観していた貝沢氏のメモが残されており、当時の心労が読み取れる。結果として「アイヌ史」とは呼べないような資料集を編纂するに留まった経緯が語られた。これら一連の出来事を総括して、荒井氏は「自己に関わる決定を奪われてならなかった」と。

＜窪田氏講演の概要と所感＞

世界各地の先住民族は、入植による苦難とそれらが引き起こすトラウマに多大な影響を受けている。それは、植民地状態が終了した現在も継続している。本講演では、こうしたトラウマを癒し、政府が先住民族と和解するための取り組みについて、カナダとオーストラリアの事例を紹介する。

この講座を受けて、「謝罪」の重要性が良く分かった。日本は、旧土人学校などを政策として行ったが、それらが抑圧的であったことを認めていない。加害者（入植者、支配者）側がその過失を認め、謝罪することにより、被害者（先住民族、被支配者）が癒されることが必要であることが海外の事例紹介から導き出される。どれだけの補償や優遇措置をしても足りるとは思えない。和解には、恐ろしいほどの時間が掛かるのだろう。

＜第 6 回の概要と所感＞

「民族史の三者構造（書くもの、描かれる者、読む者)」には、中心（宗主国、日本、和人）と周辺（先住民族、アイヌ民族）の圧倒的な力の差があり、対等ではないという「知の世界システム」についての説明。『＜沈黙＞の自伝的民族氏ーサイレントアイヌの痛みと救済の物語』(2021)　の著者である石原氏は、自身の先住民研究を「研究のための研究ではない」としている。当事者研究は、被害を受けた当事者にしか語れない言葉がある。

そして、もう一方の当事者である「和人」に関してはどうか、という私の中の問いに対する応答が、この「アイヌ遺骨問題に関する関係者インタビュー」であると、再認識できた。

11-2. 北大とアイヌを考える会

当該会は、「北海道大学が研究目的で各地から集めたアイヌ遺骨・副葬品の収集経緯、保管・管理体制、そしてその後のご遺族への対応に、どのような問題があったのか、北海道大学を構成する一員として私たちはこれらの問題にどう向き合ってゆけばよいのかなど、北大のアイヌ遺骨と関わりのある様々な問題について、多様な立場性や考えがあることを踏まえつつ、さまざまな角度から、共に学び、考えていくための「連続学習会」を開催して」います。第 1 回学習会は、2019 年 1 月 15 日「北大アイヌ遺骨副葬品問題の経緯と背景」をアイヌ・先住民研究センターの加藤博文教授 [18]が講演しました。

【ウェブサイト】https://sites.google.com/view/ikotsumondai-kensyou/

回	開催年月日	タイトル	講演者（所属）
1	2020 年 5 月 24 日 (日)	遺骨返還当事者が研究者に求めること	橋本隆行 （遺骨問題返還請求当事者）
2	6 月 26 日(金)	世界の趨勢から見た、先住民族の権利保障及び謝罪の理由・意義ーー民法学の観点から	吉田邦彦 （北海道大学法学研究科教授
3	9 月 30 日(水)	大学と先住民族との関係および研究倫理のあり方：カナダ・ユーコンの事例に学ぶこと	葛西奈津子、山口未花子、小田博志
4	10 月 19 日(月)	北大の歴史、アイヌ遺骨問題、そして謝罪について考える	木村二三夫 （平取「アイヌ遺骨」を考える会共同代表／平取アイヌ協会副会長）
5	2021 年 2 月 24 日(水)	『ラウトリッジ先住民族「返還・帰還」ガイド』の紹介 第 12 章「アイヌ民族への遺骨の返還・帰還のパラドクスと可能性：歴史的背景、現代のたたかい、未来の展望」を中心に	ジェフ・ゲーマン (北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院)

＜第 2 回の概要と所感＞

日本の先住民政策と北海道大学のアイヌ遺骨問題への対応を、アメリカ諸大学が打ち出す方策と比較しながら、北海道大学が教育機関として取るべき道についての講演。講演者の吉田邦彦氏曰く、北大コミュニティーメンバーを名宛て人としているので、アカデミズムを必要とするとのこと。

後日、主催者ホームページにレジュメがアップされた。

[18]講演後の 2019 年 4 月、アイヌ・先住民研究センター長に就任

＜第 4 回の概要と所感＞

講演者の木村二三夫氏は、今まで一貫して「全てのアイヌ遺骨の返還」と「公式な謝罪」を求めている。盗掘した遺骨を使った DNA 研究は、遺骨の人権を無視しているので容認できないとのこと。教育、研究機関である北海道大学には、この事実を後世につたえる義務もあると。

木村氏は、被害者は誰で加害者が誰かを考えろと主張する。そのように線引きをされると、加害者側のルーツしか持たない私は、被害者であるアイヌの方々にどのように接したらいいのか分からなくなり、途方に暮れてしまう。そして木村氏の怒りと悲しみが苦しいほど伝わってきて、何かできることはないかと考えてしまう。

11-3 コタンの会

国の制定する返還ガイドラインではなく、遺骨返還訴訟よる引き渡しを受け、埋葬、管理、慰霊を行うことを目的とする団体。しかし、当団体が主体となる和解等による遺骨の引き渡しは受けていない。以下、団体ホームページから 2 件の訴訟と顛末をまとめます。

①2017 年 10 月 19 日、新ひだか町・浦河町の旧墓地から持ち去られたままになっているアイヌの遺骨を返還するよう、北海道大学に求める訴訟を起こしました。そして、地域返還の手続が開始されたことを受け、2019 年 1 月 15 日その訴えを取り下げました。

②2018 年 1 月 26 日、浦幌アイヌ協会とともに、札幌医科大学と北海道に対し、浦河町と浦幌町から持ち去られたままになっているアイヌの遺骨を返還するよう求める訴訟を起こしました。そして 2020 年 1 月 21 日、同様にその訴えを取り下げました。

一方、浦河町杵臼から持ち去られたままになっている遺骨について、遺族らが 2012 年に起こした返還訴訟を支援し、2016 年 7 月に和解による引き渡しがなされた後の慰霊（イチャルパ、カムイノミ）を取り仕切っています。

ホームページには、「アイヌが古来もっている権利＝「先住権」について学び合いの場をもうけます」とありますが、コロナ禍の 2020 年はシンポジウム等の開催はありませんでした。

【ウェブサイト】https://kotankai.jimdofree.com/

11-4 NPO 法人さっぽろ自由学校「遊」

当該法人は、「市民がつくる、市民に開かれたオルタナティブな学びの場」で「楽しみながら共に学び」合うことで、「私たち一人ひとりが、出会いと共同作業の中で、新しい社会の担い手としての力をつけていく」ことを目的とし、アイヌ民族の権利について考える講座と文化を知る講座を毎年開催しています。座学だけでなく、アイヌ刺繍講座も主催。

先住民族アイヌを知るためには、日本政府が行った同化政策などの負の歴史だけでなく、言葉や生活など文化面を知ることも重要だと思います。現在は、アイヌの方々も大和系日本人とほぼ同じ生活様式で暮らしています。その中で、大多数とは違う文化を継承することの重要性も考えさせられます。

【ウェブサイト】http://sapporoyu.org/

開催年月日	タイトル	講演者（所属）
2020 年 5 月 20 日 ～9 月 16 日まで 月 1 回開催	アイヌ民族　くらしとことば （生活、文化、信仰などアイヌ民族を知る 5 回連続講座）	北原モコットゥナシ（北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授）氏ほか
2020 年 10 月 21 日 ～2021 年 3 月 17 日まで 月 1 回開催	連続講座「アイヌ近現代史読本」を読む	講師を立てず、参加者がチューターになり読み進める
2020 年 11 月 7 日（土）	アイヌ民族復権に向けた歴史を振り返る　－戦後アイヌ民族活動史	竹内渉（元・北海道アイヌ協会事務局長）

＜竹内氏講演の概要と所感＞

竹内氏はアイヌ民族の出自ではないが、公益社団法人北海道アイヌ協会の事務局長兼常務理事を務め（2015 年退任)、北海道アイヌ協会の成り立ちや民族運動に精通してる。講座は、解放出版社から発刊された「戦後アイヌ民族活動史」の内容から。

11-5 アイヌ政策検討市民会議

当該市民会議は、アイヌ政策から直接影響を受けるアイヌはもとより、アイヌ政策に懸念をもつ国内外の研究者、教育者、ジャーナリスト、芸術家、社会活動家、政治家、学生や市民らが集まり、現状のアイヌ政策について開かれた場で批判的に検討することを目的としています。その検討結果から明らかになった問題点を広く市民社会と共有し、国や道主導から当事者アイヌの自決権に基づくものへと転換するための基盤、すなわち代替策をつくり、日本政府や国連人権監視委員会など国内外の関係諸機関に提示しています。

2016 年設立。アイヌ遺骨問題、カムイチェプノミ（新しい鮭を迎える儀式）にかかるサケ漁問題などを扱い、政府に対する提言、声明をくり返し行っています。

【ウェブサイト 】https://ainupolicy.jimdofree.com/

開催年月日	タイトル	講演者（所属）
2020 年 8 月 2 日（日）	シンポジウム「ウポポイ（民族共生象徴空間）について考えよう」	
	エンチウからの異議申し立て	田澤守 （樺太アイヌ（エンチウ）協会会長）
	博物館を 5 つの視点で語る	丸山 博 （アイヌ政策市民会議代表）
	ウポポイとは何か	ジェフ・ゲーマン （北海道大学教授）
	79 歳アイヌが見聞きした「ウポポイ」	清水裕二 （コタンの会会長）
	パネルディスカッション	川村久恵（川村カ子トアイヌ記念館副館長）・清水裕二・田澤守・丸山博・ジェフ・ゲーマン

＜所感＞

市民会議ホームページで当シンポジウムの報告書が公開されている。

シンポジウム登壇者がウポポイに関わっていない方だけで構成されていたため、批判と非難ばかりで、一方的なシンポジウムだったという印象が残る。しかし、オープンしたばかりのウポポイにも改善の余地はあるので、多様な方々と建設的な関係が構築され、アイヌにとって誇れる施設に成長することを願う。

今後の展望

コロナ禍に翻弄され続けた 2020 年度は、インタビューに関しては身動きが取れない部分が大きく影響しました。しかし、オンライン講演会等に精力的に参加することにより、様々な立場からの情報発信を受け止めることもできました。

2021 年度は、もう一人の方へのインタビューを行い、3 年間の CoSTEP 研修科での活動の総括を行います。

1：常本先生のインタビュー原稿を、本人の了承を得たうえで HUSCAP に投稿

2：木村氏のインタビュー原稿を、本人の了承を得たうえで HUSCAP に投稿

3：３人目のインタビュー敢行（仮）し、　本人の了承後、HUSCAP に投稿

4：三つのインタビューから考察を JJSC へ投稿

オートエスノグラフィーの手法を参考にしながら、ルポルタージュ風に仕上げる予定

参考文献

北海道大学 報告書等

北海道大学 2013:『北海道大学医学部アイヌ人骨収蔵経緯に関する 調査報告書』 https://www.cscd.osaka-u.ac.jp/user/rosaldo/hokudai_jinkotsu_report2013.pdf（2020 年 3 月 9 日閲覧）.

北海道大学 2019: 『本学が保管するアイヌ遺骨に関する声明について』 https://www.hokudai.ac.jp/pr/johokokai/ainu/post-33.html（2021 年 1 月 30 日閲覧）.

政府機関 公開文書等

文部科学省 2019：『大学等におけるアイヌの人々の遺骨の保管状況の再調査結果』（平成 31 年 4 月現在） https://www.mext.go.jp/component/a_menu/science/detail/__icsFiles/afieldfile/2019/04/25/1376459_4_1.pdf（2021 年 2 月 9 日閲覧）

文部科学省 2019：『慰霊施設に集約された大学が保管するアイヌの人々の御遺骨の数について（令和元年 12 月 16 日現在)』 https://www.mext.go.jp/a_menu/kagaku/ainu/kakugi-kettei20190906.pdf（2021 年 2 月 9 日閲覧）

文部科学省 2020：『慰霊施設に集約された大学が保管するアイヌの人々の御遺骨の数について』（令和 2 年 10 月現在） https://www.mext.go.jp/a_menu/kagaku/ainu/ikotsusuu20201013.pdf（2021 年 2 月 9 日閲覧）.

日本学術会議 2020：『先住民族との和解と共生―アイヌの遺骨・副葬品の返還をめぐって―記録』地域研究委員会歴史的遺物返還に関する検討分科会 http://www.scj.go.jp/ja/member/iinkai/kiroku/1-20200910-1.pdf （2021 年 6 月 27 日閲覧）

日本国 2019:「アイヌの人々の誇りが尊重される社会を実現するための施策の推進に関する法律」（平成三十一年法律第十六号） https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=431AC0000000016

一般図書 等

植木哲也 2017:『学問の暴力』春風社

北大開示文書研究会 2016:『アイヌの遺骨はコタンの土へ』緑風出版

北大 ACM プロジェクト 2019: 『北海道大学もうひとつのキャンパスマップ』寿郎社

竹内渉 2020：『戦後アイヌ民族活動史』解放出版社

小笠原 信之 2019：『アイヌ近現代史読本 増補改訂版』緑風出版

ウェブサイト

民族共生象徴空間（ウポポイ）https://ainu-upopoy.jp/ （2021 年 1 月 31 日閲覧）

北海道大学　アイヌ・先住民研究センターhttps://www.cais.hokudai.ac.jp/　（2021 年 1 月 31 日閲覧）
「北大とアイヌ」を考える会 https://sites.google.com/view/ikotsumondai-kensyou（2021 年 1 月 31 日閲覧）.
アイヌ政策検討市民会議 https://ainupolicy.jimdofree.com/　（2021 年 6 月 27 日閲覧）.
NPO 法人さっぽろ自由学校「遊」http://sapporoyu.org/　（2021 年 6 月 27 日閲覧）
コタンの会 https://kotankai.jimdofree.com/　（2021 年 6 月 27 日閲覧）

アイヌ語表記に関しては、「アイヌ民族博物館　アイヌ語アーカイブ」を参照した　https://ainugo.ainu-museum.or.jp/　（2021 年 6 月 29 日閲覧）